

ニューズレター

News Letter

INSTITUTE FOR THE STUDY OF CHRISTIANITY AND CULTURE, Kanto Gakuin University

巻頭言

「キリスト教と文化研究所」のこと

「名は体を表す」という諺があります。古代宗教史の領域でも、悪霊と祓魔師の戦いで相手の名前を知ることは相手の正体を知ることであり、優位に立つとされたことが指摘されます。すると、「キリスト教と文化研究所」という名前も単なる識別記号ではなくて、私たちの研究所の実体を表していることとなります。

「キリスト教」と「文化」という2つの語が等位接続詞で繋がれる名称の研究所とは、対等ではあるが異なった2つのもので、そこで研究の対象となっている、ということでしょう。総合大学に設置された本研究所の活動は「キリスト教」という宗教についてだけでなく、諸々の文化をも研究の対象に含むのだという、創立時の意気込みを示唆する名称であったと思います。

しかしそこでは、宗教を人間の内面の事柄に関わるものとする狭かな概念定義によって、宗教が持つ広範な拡がりが見失われることになっていないか、そう反省することも必要です。なぜなら、エドワード・バーネット・タイラーの「文化または文明とは、・・・人間が社会の成員として獲得したあらゆる能力や習慣の複合的総体」という古典的定義からしても、あるいはより分析的に、「人間の行為に意味づけする象徴あるいは観念の体系」と捉え直しても、宗教は文化の一部であって、だからこそ「宗教文化」という言葉も存在するわけです。

内面的信念の部分を信仰と呼ぶにしても、その外在化としての行動様式や生活様式も含んだ全体が宗教であるなら、宗教の研究は自ずと信仰の所産としての文化研究を含むし、含まなければならないはずです。キリスト教大学に置かれた研究所としての存在意義は「キリスト教研究」と「文化研究」の協力と連携ではなくて、両者を統合的に捉える視点からの学術的探求という、本来の宗教研究が目指されるということではないか、そういう問いが沸々と湧いてきます。半世紀以上もキリスト教研究どころか新約聖書学という重箱の隅をつつくような探求を続けてきた者が最近になって強く意識するようになり、研究所に期待する遠大な目標です。



小河 陽(学校法人関東学院 前学院長)

キリスト教と文化研究所 いのちを考える研究グループ 研究会報告

『ルワンダの内戦から学んだ「いのち」の大切さ』

所員 中和 渚

(建築・環境学部専任講師)

2018年7月21日(土)に関東学院大学 KGU 関内メディアセンターにおいて、NPO法人「ルワンダの教育を考える会」の永遠瑠(とわり) マリールイズ氏をお招きしてご講演いただきました(写真)。

ルワンダの紹介と内戦(ジェノサイド)について

ご講演においては、多くの日本人にとって馴染みがあるとは言えないアフリカ、そしてルワンダにおける内戦(ジェノサイド)についてお話し頂きました。ルワンダは、1962年にベルギーから独立したアフリカ東部の小国です。マリールイズ氏は1994年にアフリカのルワンダで起こった内戦を現地でご経験されました。氏は、ルワンダ国内の難民キャンプに収容された後に大変なご苦労がありながら、日本人とのご縁を通じて、ご家族で来日されました。現在は、日本に居住され、内戦の体験やルワンダについて、また教育の重要性について、日本各地で精力的に講演を行っていらっしゃいます。

マリールイズ氏は、内戦が勃発した際の身の回りの出来事を次のようにお話しく下さいました。当時、氏のパートナーが単身赴任のため自宅不在で、1人で3人の子どもを育てていました。ジェノサイドが起こった際に、自宅では停電が数日間続いており、外からは爆弾が落ちる音が頻りに聞こえ、混乱の中、恐怖であったと言われました。それから数日経ち、家の食べ物が尽きてきたため、乳飲み子を含む子ども3人を連れ、手元にたまたまあったハンドバッグ1つを片手に持ち、家を出て、逃げ出されました。外に出て逃げる際には落下してきた爆弾が知人に当たり、亡くなられたのを目の当たりにしたということです。それでも、何もできずそのままにして逃げたという悲しい記憶を振り返られました。

難民キャンプに向かう途中、子供もご自身も疲労困憊で歩くことができず、道に横たわっていたそうです。その際に、パンが道端で売られていたそうです。当時、パンは60フランくらいだったのが、値段が高騰し、2000フランになっていました。そこで売られていたパンは、それ以上の5000フランと言われたのです。結局、ハンドバッグに入っていた、貴重なお札でパン1つを買ったのですが、カビが生えていました。氏は、どうせ死ぬならカビつきのパンを食べて皆で死のうと思ひ、子供たちに分け与えました。その後、文字通りボロボロになりながらも、どうにか難民キャンプに到着して、命拾いされたということです。

マリールイズ氏は持ち前の明るさと諦めない精神で、難民キャンプ内で仕事を探しました。偶然にも、日本人に出会い、以前学んだ日本語で話しかけたところ、通訳の仕事をするこ

とができ、働いて現金を手に入れることができました。その働いた賃金で、難民キャンプ外に、家を借りて子供たちと住むことができるようになったということです。

ご講演の最後には、ジェノサイドを乗り越えて、現在のルワンダではIT産業が目立され、高層ビルも建てられるようになってきていること、またご自身が関わるルワンダの子供たちが語る夢や希望についてもご紹介下さいました。

フロアからは本学の学生が「将来、国際協力で医療に従事したいがどのようなことに気をつけたらいいのか」という質問や「素晴らしいお話で感動した」という涙ながらの率直な感想を述べていました。会場には乳幼児から名誉教授まで総勢約30名が集まりました。ご講演後は、様々な質問が寄せられ、大変有意義な講演会となりました。



マリールイズ氏による講演の様子

永遠瑠(とわり) マリールイズ氏 略歴

- 1965年にコンゴ民主共和国に生まれる。
- 1993年に洋裁の研修を受けるため来日。
- 1994年2月にルワンダへ帰国、同年4月に内戦勃発。同年12月に家族で再来日。
- 2000年に「ルワンダの教育を考える会」を立ち上げ、ルワンダに学校を設立。
- 2012年に日本国籍取得。日本とルワンダとの相互理解の促進活動が認められ、
- 2014年に外務大臣表彰を受賞。



所員紹介

看護学部 講師 星名 美幸

看護学部の星名美幸です。専門分野は成人看護学で、主に終末期がん患者にかかわる医療連携について研究しております。

看護学部には、毎年5月に大切な宗教的イベントがあります。それは、派遣式です。派遣式は、本学の基督教に基づく教育と看護の融合を図ったイベントで、看護師を目指す3年生が校訓である「人になれ 奉仕せよ」を見つめなおし、自らの看護観や人間観を内省する機会でもあります。式典は大学の宗教主任によって執り行なわれます。学生達はグループ毎に分かれ、代表者が宣誓を發表します。厳かなパイプオルガンの演奏に始まり、保護者や大学関係者などの列席者に見守られ、看護学生として、病院実習に向けた新たな決意を表明します。

学生の宣誓では、校訓の「人になれ」とは、自己を愛することや他者を愛することではないか、「奉仕せよ」とは、見返りを求めずに行うこと、相手の立場に立って行動すること、無償の愛、相手に寄り添い気が付いて欲しいことに気づき自ら行動することではないか、という声なども聴かれました。

今回、基督教や校訓について改めて考える機会を与えて頂いたことに感謝すると同時に、今後ともご指導の程よろしくお願いいたします。



関東学院大学 基督教と文化研究所

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1

TEL: 045-786-7873 (研究所直通・月～金9:30～17:00)

FAX: 045-786-7806 (研究所直通・24時間受け付)

発行者：細谷 早里
Director: Sari Hosoya